

重要史料を提示し政府を追い詰めた軌跡

吉岡吉典著『韓国併合』一〇〇年と日本

荒井信一



私が吉岡さんとはじめて会ったのは、一九九三年、日本の戦争責任資料センターを設立した直後であった。吉岡さんとの付き合いはそれ以来のことである。昨年二月にも機会があり、韓国併合一〇〇年をどうとらえるか、意見の交換を約して別れたが、その一月後に急逝されるとは思いもよらなかった。

本書に接して、私はようやく吉岡さんと意見をかわす機会にめぐりあった気持でいる。本書の主張や内容の大筋については、巻末に収録されている急逝直前のソウルでの講演と、歴史家中塚明による解題につくされているので、私がつけかわえることはない。

吉岡さんのアプローチの特徴は、生の

資料にもとづいて議論（国会質問をふくめて）を組み立てていることである。歴代内閣は韓国との歴史問題が緊張するたびに、「侵略と植民地支配の反省」を述べた「村山談話」（一九九五年）を引き合いにだし局面を糊塗（こまぬ）してきたが、しかし村山首相も最初は「韓国併合条約は法的に有効に締結され、実施されたもの」と公言していた。この認識を「（併合条約は）大きな力の差を背景とする双方の不平等な関係のなかで、民族の自決と尊厳を認めない帝国主義時代の条約」という公式見解に改めさせた吉岡さんの国会活動はおおきく評価されている。その経緯は本書に詳しいが、重要史料を提示し論理的に政府を追い詰めていく、いかに

も彼らしいものであった。

また吉岡さんは国民レベルでの歴史認識を重視した。とくに豊臣秀吉、加藤清正や伊藤博文などの歴史的人物の評価は両国の国民レベルでは極端に割れている。吉岡さんのユニークなところは、直接名護屋城（佐賀県）、大阪城、秀吉清正記念館（名古屋市中区）など関連する記念施設を訪ねて、「いずれも豊臣秀吉の朝鮮戦争を、侵略戦争ととらえている」とことを確認し、このような公的記憶の定着とその由来を詳しく調べていることである。そしてこのような「記念施設の」努力による事実の確認と歴史認識を国民的規模に広げるための大衆的学習運動を示唆している。いわゆる韓流ブームをきっかけに日韓の大衆文化の距離が狭まった現在、歴史摩擦を克服するために吉岡さんの示唆を活かすことが必要ではないか。

〔新日本出版社 本体価格二〇〇〇円〕
（あらい・しんいち）日本の戦争責任資料センター共同代表）